

郷土あかし

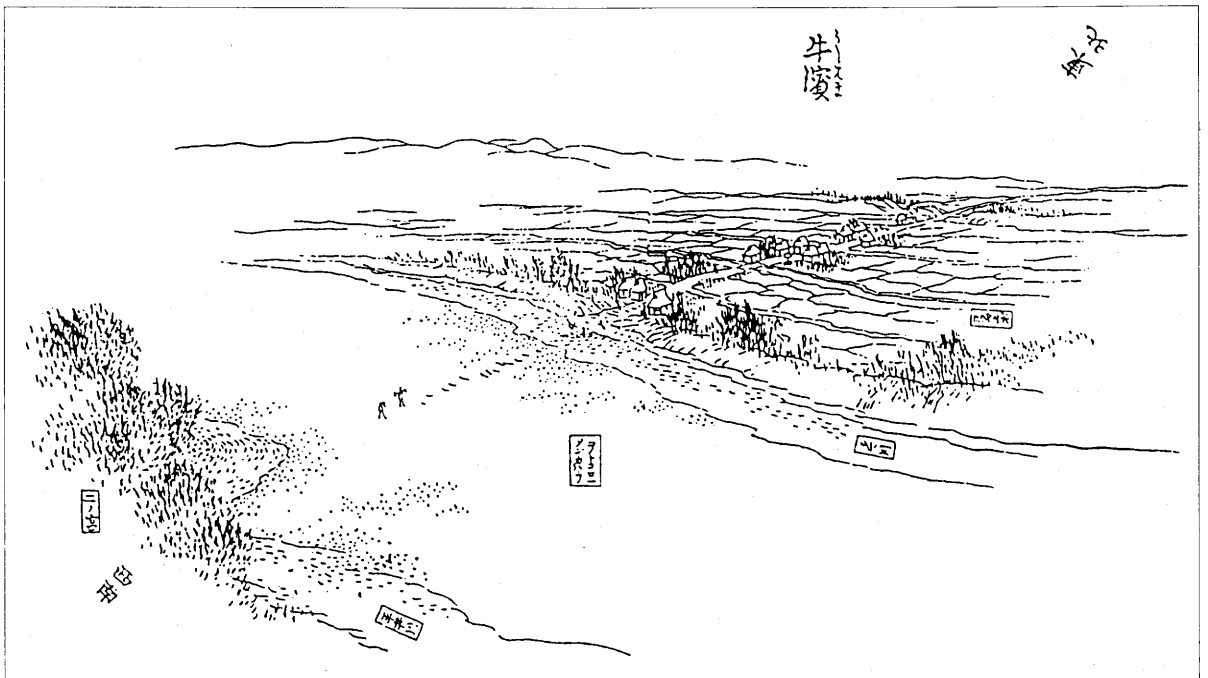
郷土館だより
第40号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

五日市街道昔語り

立川市・羽村市文化財保護審議会委員

保坂芳春



牛浜の図 『武蔵野話』(文化12年(1815)刊) 中央に五日市街道が見える

1. 五日市街道

五日市街道は杉並区梅里で、青梅街道と分かれて、杉並区、武蔵野、保谷、小金井、小平、国分寺、立川、福生、秋川の各市を通過して、五日市町のJR武蔵五日市駅前、秋川街道に合流して終わる。主要地方道7号杉並五日市線とよばれている都道である。

全長約41.5キロメートル、公式マラソンの距離が42.195キロメートルであるから、ほぼマラソンコースの距離である。

江戸時代後期の五日市街道の道筋は、近年新道に代わっ

た一部と、横田基地による付け換え部分を除けば、ほとんど現在の道筋に重なっている。

五日市街道のよび方も、地域によって違いはあるが、江戸時代には、伊奈道、五日市道、砂川道、小金井道、青梅街道脇道、青梅街道裏道、長新田道など、いろいろによばれていた。五日市街道というよび名が定着するのは、明治時代に入ってからである。

2. 古い伊奈道

五日市街道の成立については、天正18年(1590)徳川家康が江戸に入府し、江戸城の修復に着手したことがひ

とつの要因であるといわれる。

それは中世、伊奈に伊奈石を加工する石工（石切りともいわれた。）たちが多数住んでいて、石臼、板碑、墓石、井戸桁などの石造物を生産していた。

これらの石工たちが、江戸城修復に際して江戸に動員されたといわれる。「江戸整備にあたっては、当然土木工事が多く大工・左官・石工等の職人が必要なので、近から数多く、動員したものと思う。伊奈村の石工も勿論動員され江戸詰めが多かったと思うが、家族の残された伊奈村との往復も頻繁に行われたのであろう。この石工達の往来した道筋が、自然に伊奈みちと呼ばれたのである」（『五日市町の古道と地名』37ページ）という。

この伊奈に住んでいた石工たちは、中世の中ごろには信州伊那地方から移住してきたものでないかといわれる。伊奈という地名も、それに由来すると、古くからいわれているが、これには異論もある。

伊奈という地名は、中世の末ごろには武蔵の西方に、広く知られていたのである。「伊奈道」とよばれる古道の名前の残っている所は、八王子市（諏訪町）、立川市（富士見町）、武蔵村山市（伊奈平）など広い地域にみられる。

このことは、かつて伊奈という土地が、相当知られた場所であり、また重要な位置を占めていたのではないかと考えられる。単に石臼や石塔や板碑などの生産だけでは、それ程各地との交通網が開けないと思われる。

ここに注目すべき資料がある。永禄5年（1562）のものと推定される北条氏照によって、平井郷に出された「伝馬定」と、伊那（奈）平井両郷にて、伝馬を隔番に勤める旨の命令が記された文書である（日の出町、田中家文書）。

これらは、後北条氏の交通政策を知る上に重要であるばかりでなく、中世後期の伊奈を考える上に、欠くことのできない資料である。

伊奈を通る鎌倉街道は、「山の道」とよばれ、鎌倉から山の根を秩父へ抜け、遠く上州方面に達していた。この道は、中世後期には、後北条氏の根拠地であった小田原へ通ずる要路にもなったのである。

さらに伊奈は秋川谷の溪口を扼している。秋川谷を遡って、檜原に出れば甲州方面へ抜ける道が、いくつも通じていたのである。

こうして中世末期における伊奈は、秋川谷を押える交通の要衝であったばかりでなく、後北条氏にとっては軍略上からも重要な地点であったと思われる。

また一、六の日には市が立って、秋川谷から、秋川下

流の農村地帯の経済の中心でもあった。伊奈という土地が、後北条氏に注目され、各地の拠点と伊奈を結ぶ道筋がいくつもあったと予想される。こうした背景があったから「伊奈道」とよばれた古道が今も残っているのであろう。この道筋は当然、伊奈石の製品の販売ルートとしても、使われたし、伊奈の石工たちが、江戸城修復に動員された折、利用した道筋でもあったに違いない。

こうした江戸城修復に動員された伊奈の石工たちが往来したので「伊奈道」は、「江戸道」ともよばれるようになったのであろう。

では、伊奈の石工たちが、江戸往来に利用したと思われる道筋はどんなコースをたどったのであろうか。これは後の五日市街道に発展する古い「伊奈道」である。

まず考えられるのは、江戸時代の古村でみれば、伊奈を出て、山田、引田、湖上、代継、油平、牛沼、雨間、野辺、小川と進んでいく。小川から小川の渡しとよばれた渡河点で多摩川を渡って、熊川村の内出に出る。ここには「伊奈の大悲願寺」とよばれていた大悲願寺の末寺であった真福寺がある。この前で道は二つに分かれる。右へいけば拝島、柴崎、府中へと続く、一方真つ直ぐに東寄りに北上して、今のJR拝島駅付近から東北に向かう道があった。玉川上水に架かる天王橋付近で、村山方面から南へ、上川原、滝山方面をみざす道と交差したのである。

ここからさらに東進して、現在の玉川上水の境橋付近で東北方に曲がり、石神井、練馬方面に向かったと思われる。この道は、関付近で江戸から狭山丘陵方面、さらに三田谷といわれた青梅付近へ通ずる道と交わるのである。この道筋が古い「伊奈道」で、後の五日市街道へ発展していく道筋であると思う。

江戸開府から50年程経って、玉川上水の建設が始まる。玉川上水は熊川村の水くらいの難工事場を過ぎると、「伊奈道」沿いに建設されていることは注目される。これは資材の運搬や、工事従事者の通行に便利であったことと、地形の測量などにも有利であったからであろう。砂川から小平市上水本町にかけて、地形の関係で一部上水を離れるが、境橋付近までは、ほぼ並行しているのである。

3. 五日市街道の成立

江戸は幕府のお膝元として発展を続けたが、明暦3年（1657）に大火に見舞われた。その後、防火のため茅葺屋根は禁止され、札野とよばれた幕府御用の茅刈場は不用となった。その結果、大宮前から、吉祥寺、関前にか

けて約2里(実測6.5キロメートル)の間に、8間(約14メートル)幅の道路が作られ、新田として開発されたのである。五日市街道はここを通ることになり長新田とよばれ、東は成宗などの村を経て馬橋で青梅街道へ出たのであった。

江戸は次第に都市として発展し、物資の流通もさかんとなり、江戸周辺の地廻り経済も活況を呈するようになった。その影響は秋川谷にも波及し、特に特産の木炭の需要も高まってきた。伊奈宿は江戸時代に入って発展してきた五日市宿と市場争いを続けたが、遂に享保20年(1735)には、木炭市場は五日市宿の制圧に帰した。

その頃、享保の改革による武蔵野新田の開発が進められていて、砂川新田の西方に中里、殿ヶ谷、宮沢の三新田が開発され、天王橋から牛浜へ出る道が開通した。この道は牛浜の渡しで多摩川を渡り二宮宿へ出たのである。

二宮宿は中世、近くに大石氏居館もあって、市場らしい姿になっていたようである。元禄2年(1689)の二宮村絵図を見ると、本宿と北宿の家並みがよく描かれている。「古い伊奈道」も、雨間、野辺あたりから、この二宮宿へ出て、小川の渡しへ向かう道もあったらしい。

江戸時代も半ばになると、秋留っ原の開墾も進み、作場道も整備されるようになった。二宮宿から秋留っ原を貫ぬいて、代継へ出て、段丘を斜めに下って引田で「古い伊奈道」へ合流した。ここに往来する人馬を目当てに原店が誕生したのである。

『武蔵名勝図会』の熊川村牛浜の渡しの記事に、

「この往還は檜原村、五日市村辺より江戸道なり。

それより砂川通り長新田を通りて中野道へ出る。玉川向こうの西の方は平沢村と二の宮村との界より二の宮村内を経て雨間、平井の原へかかりて往還あり」(慶友社版184ページ)(牛浜の渡し絵図は1頁参照)

とある。これは秋留っ原を通る五日市街道を指している。

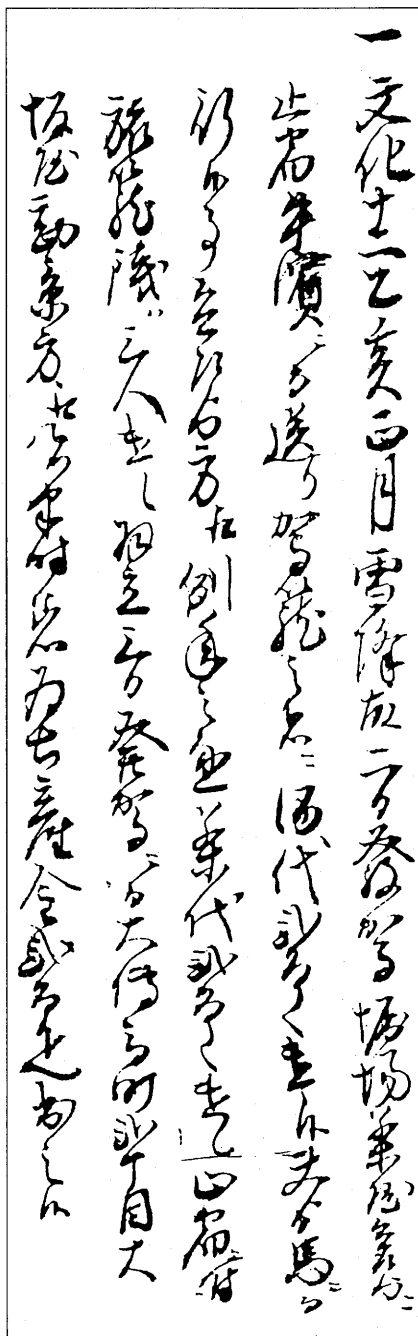
『武蔵名勝図会』は文政3年(1820)の序文を載せている。江戸後期には、現在の五日市街道の原形は完成していたのである。

天王橋の西際に、明和2年(1765)に建てられた道標がある。「右いなふさみち」(伊奈・福生)とあって、西砂川新田を通る道は「いなみち」とよばれている。それから半世紀経って書かれた『武蔵名勝図会』では、「五日市辺より江戸道」となって、五日市道の名が、定着していく過程が分かるのである。

ただ五日市街道は、秋留っ原を通る道だけでなく、油平、牛浜を経由する「古い伊奈道」の道筋を利用した場

合も多かったのであろう。また伊奈から町屋街道を利用した場合もあった。町屋は埼玉県入間市扇町屋であるが、伊奈から平井原を横切って瀬戸岡、草花へと通じていた。瀬戸岡から平沢、二宮宿へと出たり、草花から牛浜の渡しへ向かった場合もあったと考えられる。(街道余話参照)

4. 街道余話

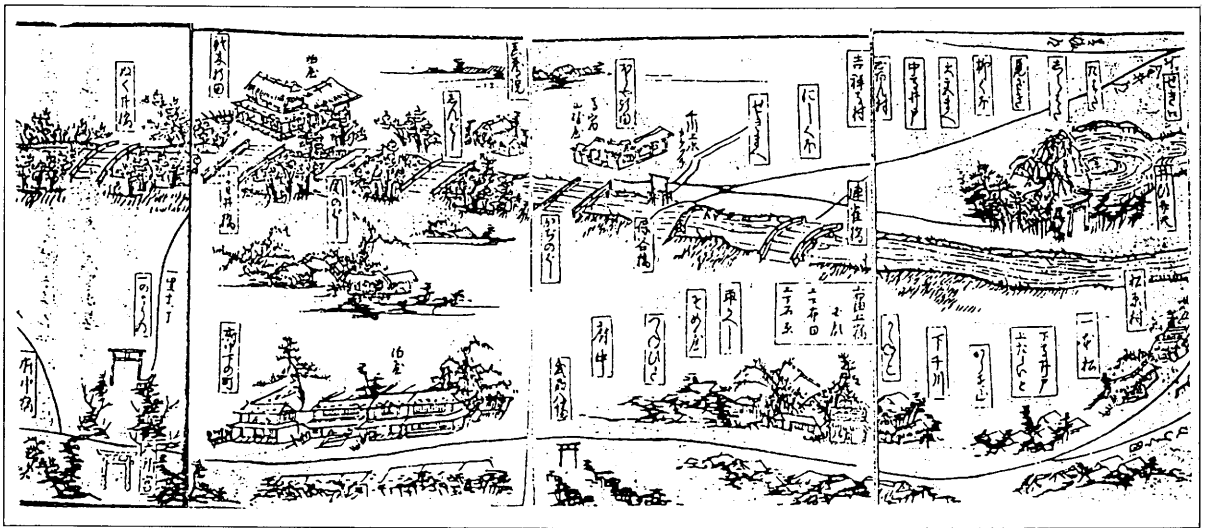


『独御礼記録』文化12年の部分

五日市街道は、甲州道中(正徳6年(1716)より甲州街道は甲州道中とよばれるようになる。)や青梅街道と比べると、街道としての機能もやや低かった。甲州道中は五街道の一つであるし、青梅街道は甲州裏街道といった性格もあった。

しかし、五日市街道は大宮前新田から、西砂川新田まで全部新田村であった。このことは街道としての重要性を生まなかった。そのため沿道の村々をつなぐ生活道路のような性格が長く続いたのである。

このたび大悲願寺の古文



『玉花勝覧』(文化元年(1804)序文)より・中央 馬宿山崎屋が描かれている。

書調査で発見された『独御礼記録』という貴重な記録がある。それは大悲願寺の歴代の住職が、年賀の挨拶に江戸城へ登城した折の日記である。大悲願寺を出て、江戸へ到着するまでの記録が簡潔に述べられている。その中の一部を紹介して、五日市街道の昔を振り返ってみたい。

寛政三年亥正月登城 慈明 寛政3年(1791)

一、亥正月三日^{午前4時}発足牛濱迄乗物^ニ而行、夫^{より}乗掛馬也、原之茶屋昼飯、爲^{として}年始貳百文遣之候、茶代共兼候也、七ッ時大伝馬町大坂屋勘兵衛宅江着。

文化三年寅正月登城 慈明 文化3年(1806)

一、寅正月二日発駕、牛濱^ニ而輿^を帰ス、尤酒錢^与之夫^{より}長新原茶屋平左衛門へ休、爲^{として}年玉貳百銅遣候、吸物酒等出之、次ニ大坂屋勘兵衛殿へ着。

文化十二年正月登城 宝明 文化12年(1815)

一、文化十二乙亥正月、雪降故二日発駕、堀場茶屋兵左衛門^ニ止宿、牛濱^ニ而送り駕籠^之者^ニ酒代貳百文遣候、夫^{より}馬^ニ而行候事、兵左衛門方江例年の通茶代二百文遣候、止宿ニ付旅籠錢ハ三人遣候、翌三日発駕^ニ而、大伝馬町^丁目大坂屋勘兵衛方江、八ッ半時着、爲^{として}土産金貳百疋出之候。

嘉永四辛亥正月 惠鏝 嘉永4年(1851)

一、十日麻布発足、明六時中野団子屋小休、茶代拾疋置く、其^{より}長新田通堀端中食、牛濱角屋小休、草花大行寺着仕候。

これらの記録をみると、大体朝七ッ立ちで、大悲願寺を出発、牛浜の渡しまで駕籠で来て馬に乗り換える。この道筋は明らかでない。牛浜から馬で砂川へ出て、長新田原の茶屋へ九ッ頃(午後零時頃)着く。昼食は此処と

決まっていた。茶屋は代々兵左衛門とよばれていて、今の保谷市新町6丁目にあった馬宿で、屋号は山崎屋とよんでいたのである。江戸へ出る人々はよく利用したようで、文化12年(1815)には、大悲願寺の住職宝明和尚も、正月二日雪のため一泊している。

山崎屋を昼頃出発した住職一行は、夕方午後3時頃江戸大伝馬町へ着いている。この山崎屋を出てから江戸までの行程が明らかでない。大宮前新田から成宗を通り馬橋で青梅街道へ出るのが、五日市街道の道筋である。勿論、この道筋も利用したと思われるが、保谷付近の人々が、荷馬車や徒歩で東京へ出た戦前までは、吉祥寺の四軒寺から、今の女子大通りをいって青梅街道へ出たという。この道は、大きい坂もなく、早く青梅街道へ出られて、距離も少し短い。馬や徒歩では、坂もなく、少しでも近いということは魅力であったと思う。住職一行もこの道筋を利用したこともあったと考えられる。

また先にも触れた伊奈から町屋街道を瀬戸岡、草花といて、森山から牛浜の渡しへ出た道筋も、『独御礼記録』には、嘉永4年に江戸からの帰途、ここを通った記録がある。牛浜から草花の末寺であった大行寺へよって、一泊しているのである。

何れにしても、五日市街道を往来した記録が少ないので、この『独御礼記録』は、まことに貴重な資料であると考えられる。